



広報誌

PLUS

第 11 号 発行日 令和 7 年 12 月

発行者 生活介護事業所 プルスペース

～ 明日も通える ～

管理者 金田 紘和

まだ開所して間もないということもあり、「プルスペース」に通われている方々の年齢層は比較的若いという特徴があります。しかし、20歳になったばかりの方も含まれる利用者さんの中でも、およそ半数の方は既にグループホームでの生活を始められており、送迎サービスを利用されながら当事業所の日中活動に参加されています。

当然、自宅での生活とは異なり、グループホームという“共同の住まい”での安定した生活がどうしても難しく、複数のグループホームへの挑戦のなかで不適応行動が表出したことを理由に、入院や遠方の入所施設での生活へ移らざるを得ず、通所サービスの利用契約を終えられた方もいらっしゃいました。

私たちが提供する生活介護事業での“日中活動の場”における支援と、共同生活援助事業での“生活の場”で求められる支援は、一部重なるところもあります。しかし、激しい自傷行為や他害行為、癇癪やパニックといった行動については、通所事業所では時間をかけて一つひとつの課題に取り組み、将来のより良い生活を共に考えていくことが可能となる一方、生活の場であるグループホームでは、他利用者さんの生活の安全を守る必要から、不穏時には居室で過ごして頂く対応が必要となったり、複数の支援者で対応しなければならない場面があったりと、現在の制度が想定する人員体制では安定した支援の提供が難しいのが現実ではないかと感じています。

入所施設の定員削減が求められている現在の福祉の流れも踏まえると、“行動障害を有している方々”の生活の場は、どうしても限られてしまっているように思えます。今年9月、「福祉新聞」に「精神科の入院、強度行動障害は対象外」という記事が掲載されました。記事では、厚生労働省が強度行動障害のある方など慢性期に当たる患者の入院について、「障害福祉や介護保険のサービスによって地域や施設の対応力を高めることで適正化していく」と示したとされています。強度行動障害を有する方はもちろん、そのご家族にとって、医療との繋がりとなる入院ができなくなるかもしれないという不安は計り知れません。入所施設の定員を減らし、入院サービスからも切り離していく“引き算”を進めるのであれば、同時に、必要な支援を無理なく提供できるだけ制度やサービスの“足し算”が求められるはずです。「明日も通える／利用できること」。これがプルスペースの理念でもあり、利用者さんご本人とご家族が求められる最も大きな“安心”であると考えております。その安心の一端でも担うことができるよう、これからも利用者の皆さんとのかかわりを積み重ねていきたいと思っております。



～ 感染対策 ～



寒さによって体調を崩しやすいことに加えて、インフルエンザやノロウイルス、風邪などの感染症が気になる季節になりました。

体調の変化が大きな負担につながる方にとって、日々の「予防」はとても大切です。手洗いやうがい、換気、しっかりと休むことなど、身近な工夫が健康を守る力になります。ご本人だけでなく、ご家族や支援に関わるみなさんと一緒に、無理なく続けられる予防を心がけていきましょう。

看護師 松鼻 一三



(有) 万葉堂
生活介護事業所
プルスペース

